

経済学部長

本学経済学部は、現代経済、生活環境経済、国際経済の3学科からなっています。いずれの学科も経済の理論・歴史・政策の基礎を学んだ上で、データにもとづく現代経済の分析方法を学ぶ、人びとの「生活の質」の改善を考える、あるいは語学にも力を入れたグローバルな問題を考える、といった、それぞれ特徴のある学びを深めていくというカリキュラムになっています。

経済学部の特徴の一つは、伝統です。1880（明治13）年に開校した本学の前身、専修学校は、日本で初めて日本語で経済学が学べる学校となりました。より多くの人に、平易に、経済学の教養を身につけてもらうということから出発しており、その精神は今も受け継がれています。

経済学を学ぶ皆さんには「思考の座標軸」を身につけてほしいと願っています。社会で起きているさまざまな事

永島 剛

象や政策を整理するためには、何らかの座標軸を持つ必要があります。

ややもすると、物事を整理する時にAIを利用する流れができています。AIに頼りきりになってしまったり、自分としての考えを持ちにくくなってしまいます。世の中は、シンプルには理解できないことが多い。ゆえに、複雑な物事も自分の中に落とし込めるような、思考の枠組みや歴史観が必要となります。大学の4年間は、このような思考、視点を育むための時間ともいえるでしょう。

分かりやすさだけを求めるのではなく、難解な問題も分かるようになる努力を続けてほしい。その中できっと、興味をひかれることが出てくるでしょう。ぜひ、そこを入り口に探究してほしいですね。授業だけが全てではありません。アルバイトやサークル活動、あるいは皆さんの消費活動も、みな「経済」に関わっているのですから。



略歴 サセックス大学人文研究センター歴史学専攻博士課程修了。博士（歴史学）。2005年本学経済学部講師。14年同教授。専門は経済史、医療史。専修大学フィルハーモニー管弦楽団団長。ピオラを担当し、「オーケストラに参加してみんなで合奏するって楽しいですね」と、入学式・卒業式では祝賀演奏に加わる。東京都出身。57歳。

新学部長に聞く

任期満了に伴う5学部の学部長選が各学部教授会で行われた。経済学部長に永島剛教授、経営学部長に石崎徹教授、人間科学部長に大矢根淳教授、国際コミュニケーション学部長に上原正博教授が選出された。文学部長には高久健二教授が再任された。それぞれ任期は9月1日から2028年8月末まで。新任の4学部長に、学部の特色や抱負などをお聞きした。

経営学部長



「理論と実践の融合」。これが経営学部の大きな理念です。自分でテーマを選択する「テーマ制」を設けており、今年度のカリキュラム改正により内容が新しくなりました。経営学科は「戦略と組織のマネジメント」、ビジネスデザイン学科は「商品開発と事業創造」を独自必修テーマに定め、さらに学部共通テーマの中から、興味のある分野を選択します。「1から100へと育てる」経営学科、「0から1を生み出す」ビジネスデザイン学科、それぞれの独自性をこれまで以上に上げていきます。

演習科目も充実しており、すべての学生が実践的な学びや専門的な研究に触れられる環境を整えています。実際の企業活動や社会の動きを説明できてこそ理論であり、一方で理論的な裏付けがなければ実務も発展しません。それは、私の専門である広告・マーケティングにもいえることです。授業やゼミを通じて、企業や経営の知見を身につけると同時に、消費者の立場から読み解く力も身につきます。そうした学びは、社会を見る新たな視点につながっていきます。

石崎 徹

経営学部60周年を機にアニバーサリーイベントを開催し、卒業生起業家のスピーチや在学生との交流などを行っています。また、石巻専修大学経営学部から毎年「国内留学」生を受け入れています。石巻専大に戻ってから、研究を続けたり、ゼミ生と交流したりする学生も多いです。こうした活動は本学学生にとっても刺激になり、大きな輪が広がっています。

学びの価値は、社会に出てから見えてくることもあるでしょう。経営学部での理論と実践を通じて経営マインドを磨き、自分の専門性と幅広い視野を会得してほしい。そして授業・演習・人とのつながりを大切にしながら、社会に出てからも役立つ力を養ってほしいと願っています。

略歴 早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。1998年本学経営学部講師、2006年同教授。剣道教士七段。大学時代からは剣術の小野派一刀流を学び、17年免許皆伝。本学剣道部顧問の傍ら、地元川崎市の剣道場、小野派一刀流道場でも指導する。「剣を握るときは平常心を心がける」という。東京都出身。57歳。

「理論と実践の融合」理念に



20年ぶりの街で見つけた静かな変化



少年犯罪を減らすことも明らかになりました。子どもが安心して育つ環境への投資は、その子の人生だけでなく、社会全体にも長期的な利益をもたらします。目に見えにくい変化の背景には、これまで積み重ねられてきた子どもへの投資があるのかもしれませんが。

少子化は日本にとって大きな課題です。しかし見方を変えれば、一人一人の子どもをこれまで以上に大切に育てる社会をつくる機会でもあります。大学で学ぶ皆さんの中には、将来、教育や行政に携わる人もいれば、企業で働く人もいるでしょう。どんな道に進んだとしても、皆さんの仕事は次の世代の子どもたちにつながっています。20年後、皆さんが久しぶりにこの街を歩いたとき、「昔より、もっと暮らしやすくなった」と感じられるような社会を、一緒につくっていかれたらと思います。（学生部委員・森啓明）

20年ぶりに、学生時代を過ごした街へ戻ってきました。鉄道が開業し、新しい駅の周辺にはマンションが建ち並び、街は大きく姿を変えました。そして、もう一つ気づいたことがあります。学生だった頃は、夏の夜になると毎日のように暴走族の爆音が聞こえ、「夏の風物詩」のように感じていました。それが今では、ほとんど耳にすることがありません。どうやら年齢を重ねて耳が遠くなったわけではなさそうです。実は、この変化は気のせいではありません。統計を見ると、10代少年の刑法犯検挙率は、この20年ほどで約5分の1まで低下しています。闇バイトなどの事件が大きく報じられるため、治安は悪化しているように感じがちですが、データは日本社会が着実に安全な方向へ変化してきたことも示しています。

私は教育や犯罪を経済学の視点から研究しています。その中で、子育て支援の充実が将来の

社会科学研公開講座 小山名譽教授が講演

社会科学研究所（樋口博美所長）主催の公開講座「太閤秀吉の誕生と近衛家女性」が7月9日、神奈川県川崎市多摩市民館で開かれた。

本学図書館所蔵の『源氏の物語のおこり』を題材に、王朝文学が専門の小山利彦名譽教授が、階級やジェンダーなど社会的な視点も交えて講演し写真。宮中祭祀など豊富な知識を持つ小山名譽教授の話は、今日の京都とは異なる平安京の時から、現在放映中の大河ドラマまで縦横無尽に及んだ。受講者は深くうなずきながら、最後まで熱心に聴き入っていた。

計 報

鐘ヶ江晴彦氏（かねがえはるひこ）名誉教授・元文学部教授 7月23日、79歳で死去。1979年から2017年まで在職。専門は教育社会学。

福富忠和氏（ふくとみ・ただかず）元文学部教授 7月23日、71歳で死去。2007年から26年まで在職。専門はコンテンツプロデュース。

